

口永良部島の火山活動解説資料

福岡管区気象台
地域火山監視・警報センター
鹿児島地方気象台

＜噴火警戒レベルを2（火口周辺規制）から1（活火山であることに留意）に引下げ＞

口永良部島では、主に古岳火口付近を震源とする火山性地震が2024年12月上旬に一時的に増加しましたが、その後は減少しています。また、その他の観測データにも火山活動の活発化を示す特段の変化は認められません。

これらのことから、新岳及び古岳の火口周辺に影響を及ぼす噴火が発生する可能性は低くなったと判断し、本日（14日）11時00分に噴火予報を発表し、噴火警戒レベルを2（火口周辺規制）から1（活火山であることに留意）に引き下げました。

なお、火山活動は低下していますが、山体の浅いところを震源とする火山性地震がやや多い状態で経過していますので、今後の火山情報に留意してください。

【防災上の警戒事項等】

活火山であることから、新岳及び古岳の火口内では、火山灰等が噴出する可能性があります。また、新岳西側割れ目等の地熱域では、高温の噴気や火山ガス等に注意してください。

地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

○ 活動概況

口永良部島では、主に古岳火口付近を震源とする火山性地震が2024年12月上旬に一時的に増加しましたが、その後は減少しています。また、その他の観測データにも火山活動の活発化を示す特段の変化は認められません。

火山活動の低下が認められることから、本日（14日）11時00分に噴火予報を発表し、噴火警戒レベルを2（火口周辺規制）から1（活火山であることに留意）に引き下げました。

東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、屋久島町及び気象庁が実施した観測では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、2024年8月以降は1日あたり概ね100トンを下回っており、9月以降は検出限界を下回る日も時々みられるなど少ない状態となっています。

GNSS連続観測では、2023年11月以降、山体の膨張を示す変動は認められません。

なお、2023年6月以降、古岳火口付近を震源とする火山性地震は増加した状態で経過しています。また古岳火口周辺の地熱域についても2023年6月の活動活発化以前と比較して拡大した状態が継続していますので、今後の火山情報に留意してください。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページでも閲覧することができます。

https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php

資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/now/kazan/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土地理院、京都大学、東京大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所及び屋久島町のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』を使用しています。噴火警戒レベルの判定基準表については気象庁ホームページを御覧ください。

https://www.data.jma.go.jp/vois/data/filing/level_kijunn/keikailevelkijunn.html

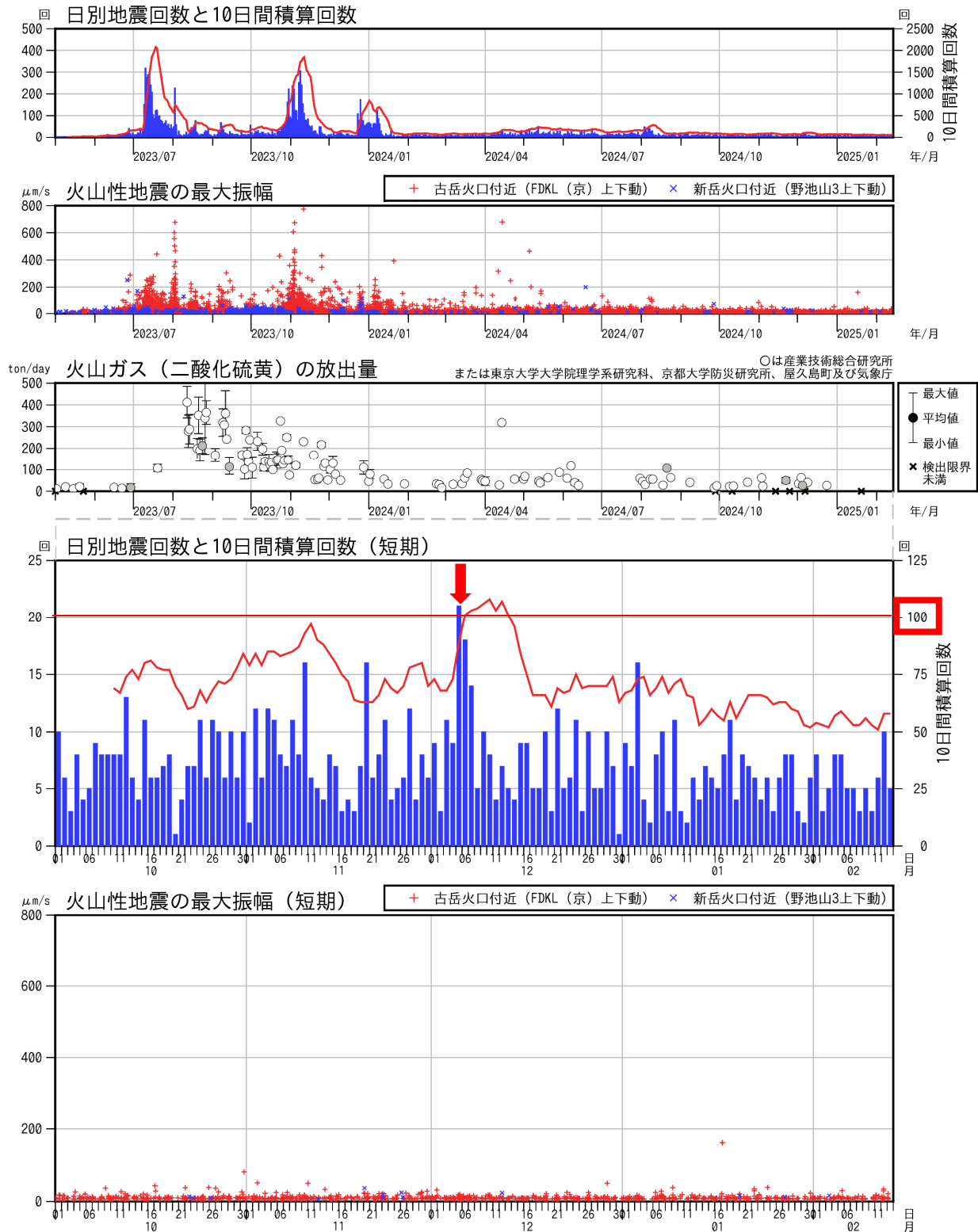


図1 口永良部島 火山性地震の発生状況と火山ガス（二酸化硫黄）の放出量
（1～3段目：2023年5月1日～2025年2月13日、4・5段目：2024年10月1日～2025年2月13日）

- ・主に古岳火口付近を震源とする火山性地震が2024年12月上旬に一時的に増加しましたが（図中赤矢印）、その後は減少しています。振幅の大きな地震は発生していません。
- ・東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、屋久島町及び気象庁が実施した観測では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、2023年9月以降次第に減少しています。2024年8月以降は1日あたり概ね100トンを下回っており、9月以降は検出限界を下回る日も時々みられるなど少ない状態となっています。

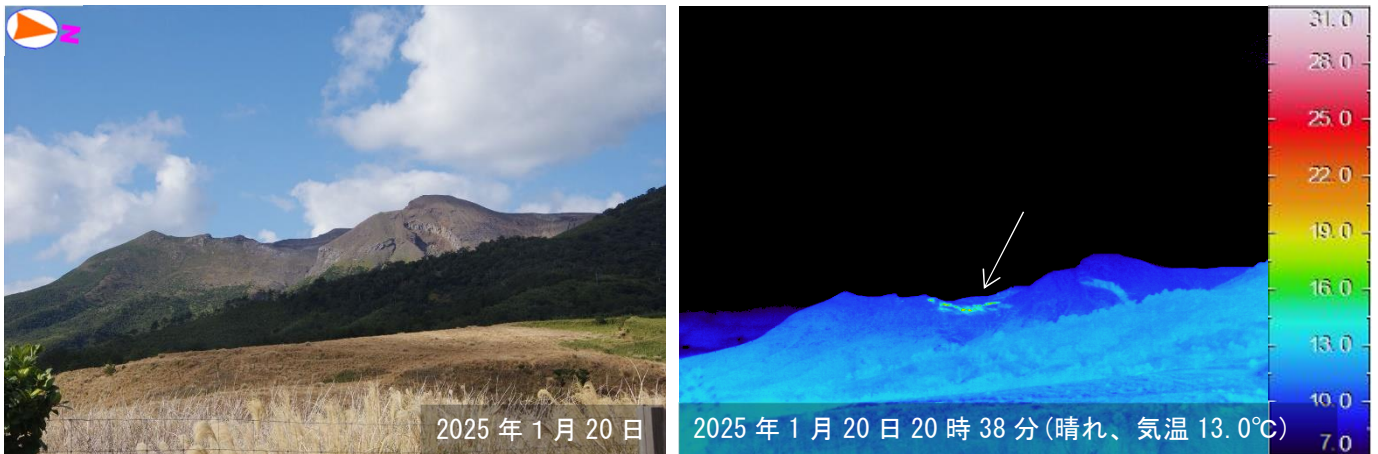


図 2-1 口永良部島 古岳周辺の地熱域の状況（湯向から観測）

- ・古岳火口周辺の地熱域は、2023 年 6 月の活動活発化以前と比較して拡大した状態が継続しています。
- ・1 月 20 日から 22 日に山麓から実施した現地調査では、古岳火口付近で地熱域を引き続き観測しました。地熱域の最高温度は 2024 年 12 月の観測と比べてわずかに上昇が認められました。古岳火口からは、火口縁をわずかに越える白色の噴煙を確認しました。

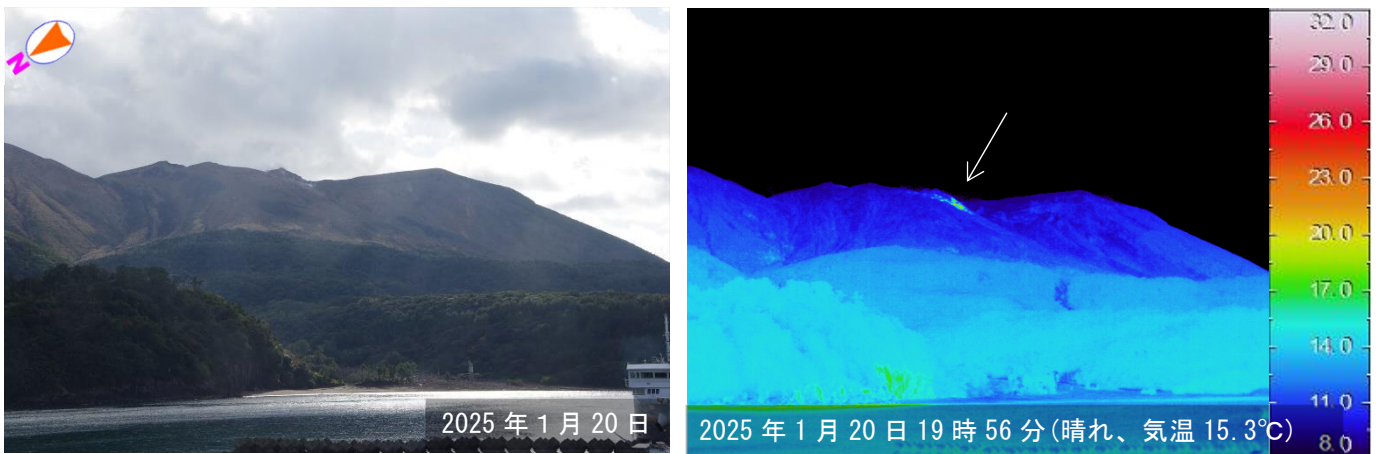


図 2-2 口永良部島 新岳火口及び新岳火口西側割れ目付近の状況（本村から観測）

1 月 20 日から 22 日に山麓から実施した現地調査では、新岳火口西側割れ目付近で引き続き地熱域を観測しましたが、特段の変化はみられませんでした。

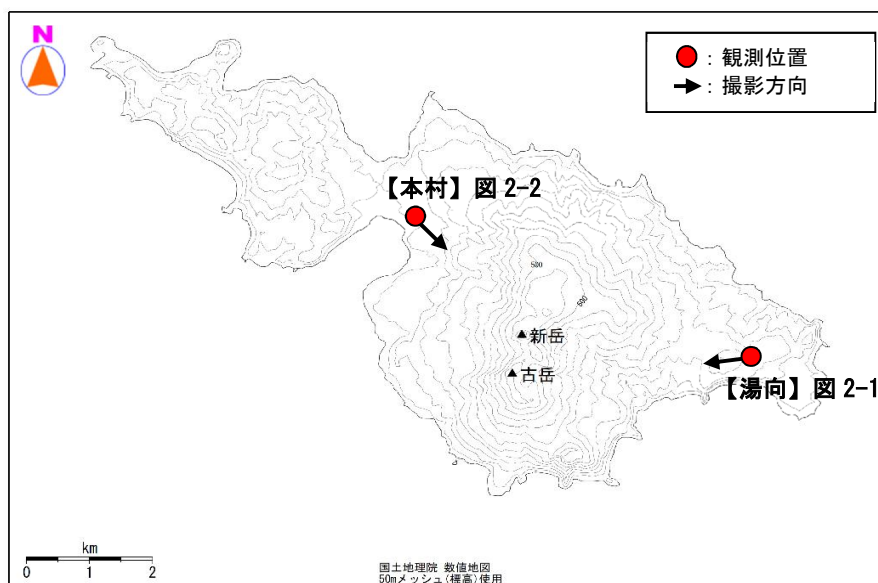


図2-3 口永良部島 観測位置及び撮影方向

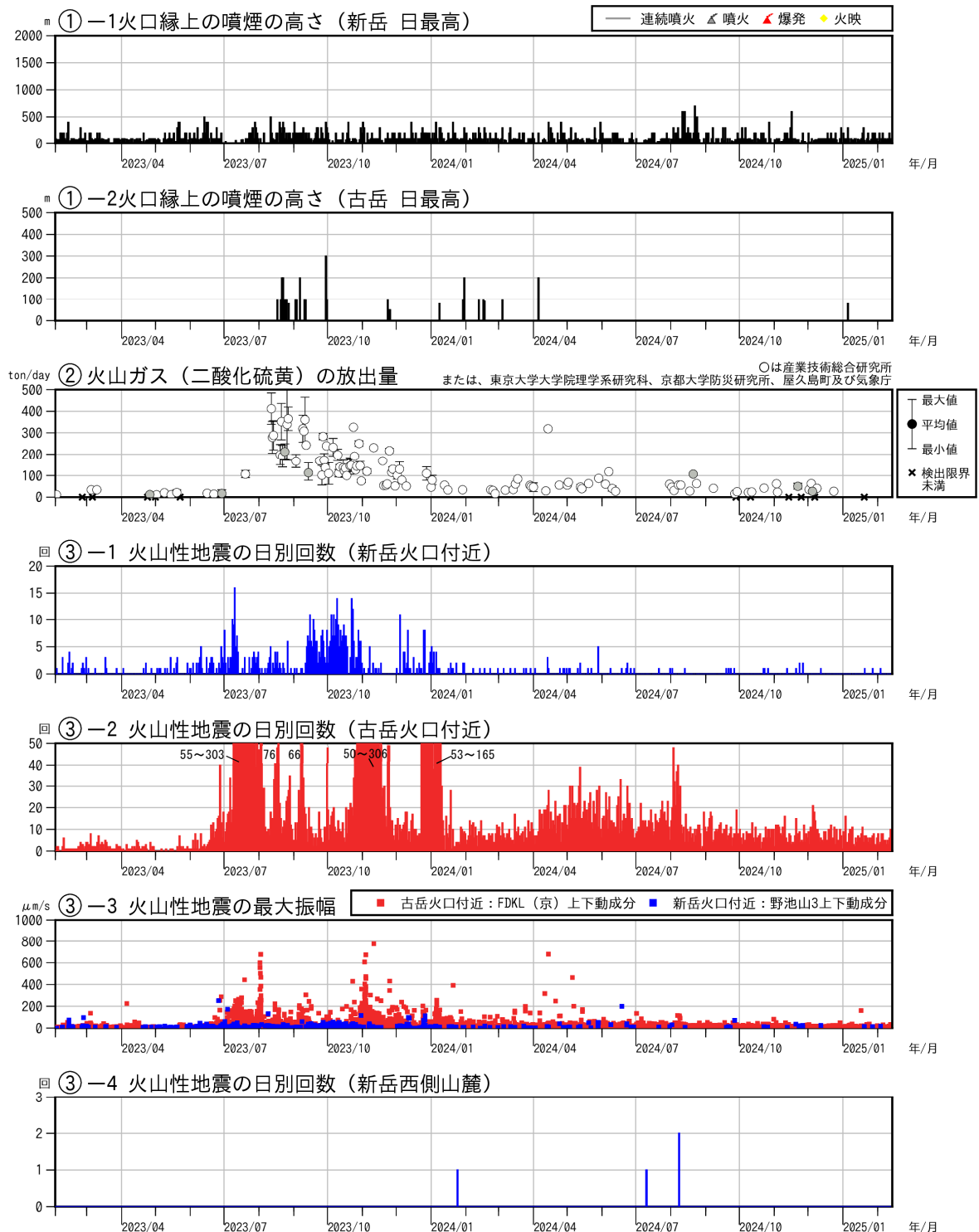


図3 口永良部島 最近の火山活動経過図（2023年2月～2025年2月13日）

- ・2023年6月以降、古岳火口付近を震源とする火山性地震は増加した状態で経過しています。
- ・火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、2023年9月以降次第に減少しています。

<2024年12月以降の状況>

- ・新岳では、白色の噴煙が最高で火口縁上 300mまで上がりました。古岳では、白色の噴煙が一時的に火口縁上 80mまで上がりました。
- ・東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、屋久島町及び気象庁が実施した観測では、火山ガス（二酸化硫黄）の1日あたりの放出量は、30～60トンと少ない状態で、検出限界を下回る日もみられました。
- ・古岳火口付近の火山性地震はやや多い状態で経過しています。新岳火口付近の地震は少ない状態で経過しています。
- ・新岳西側山麓付近の火山性地震は2024年9月以降、観測されていません。

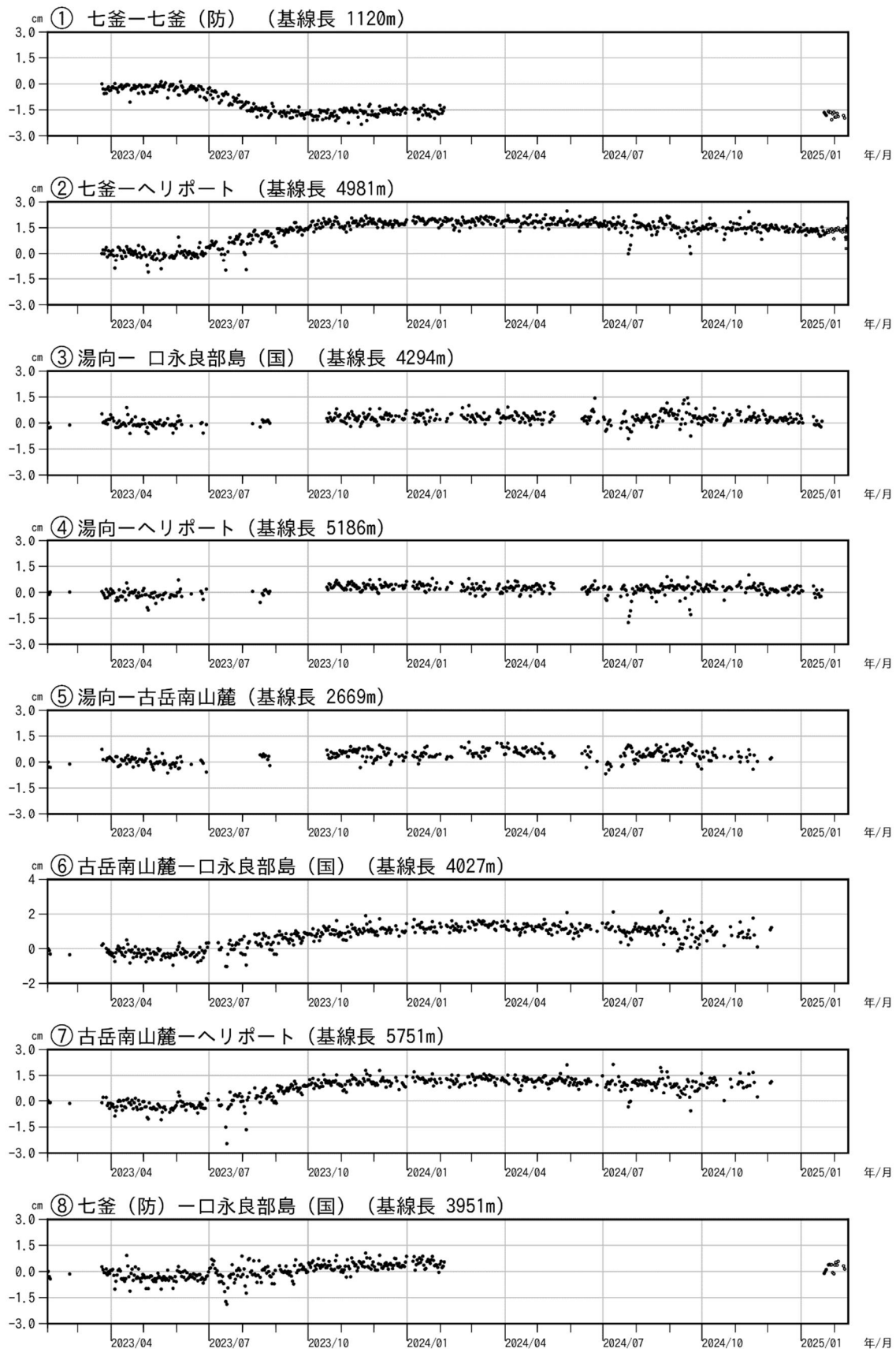


図4 口永良部島 GNSS 連続観測による基線長変化 (2023年2月～2025年2月13日)

GNSS 連続観測では、2023年11月以降、山体の膨張を示す変動は認められません。

これらの基線は図5の①～⑧に対応しています。

基線の空白部分は欠測を示しています。

2023年3月23日の観測点修繕工事（七釜観測点）に伴うステップを補正しています。

（国）：国土地理院、（防）：防災科学技術研究所

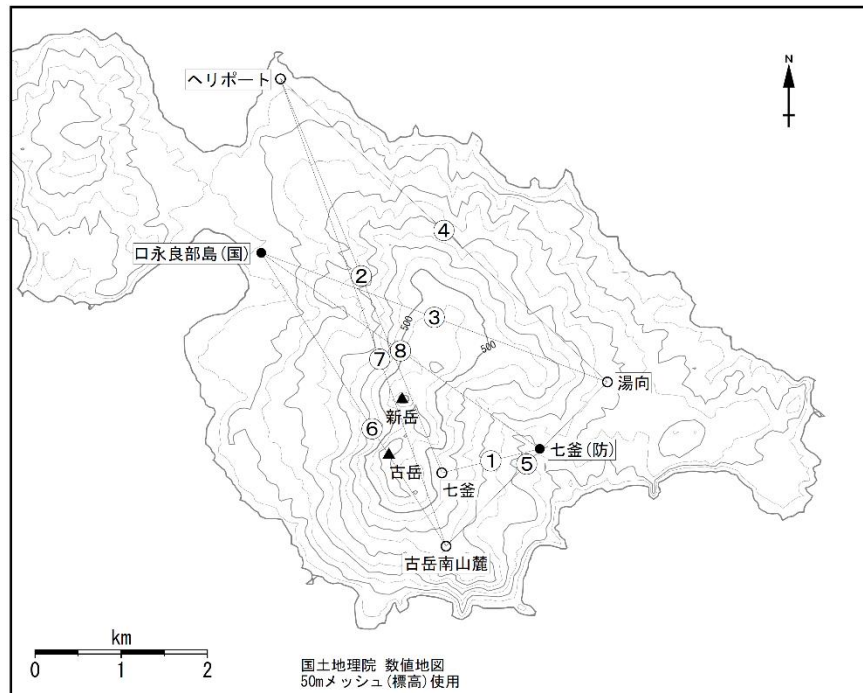


図5 口永良部島 GNSS 連続観測点と基線番号

小さな白丸(○)は気象庁、小さな黒丸(●)は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。

(国): 国土地理院、(防): 防災科学技術研究所

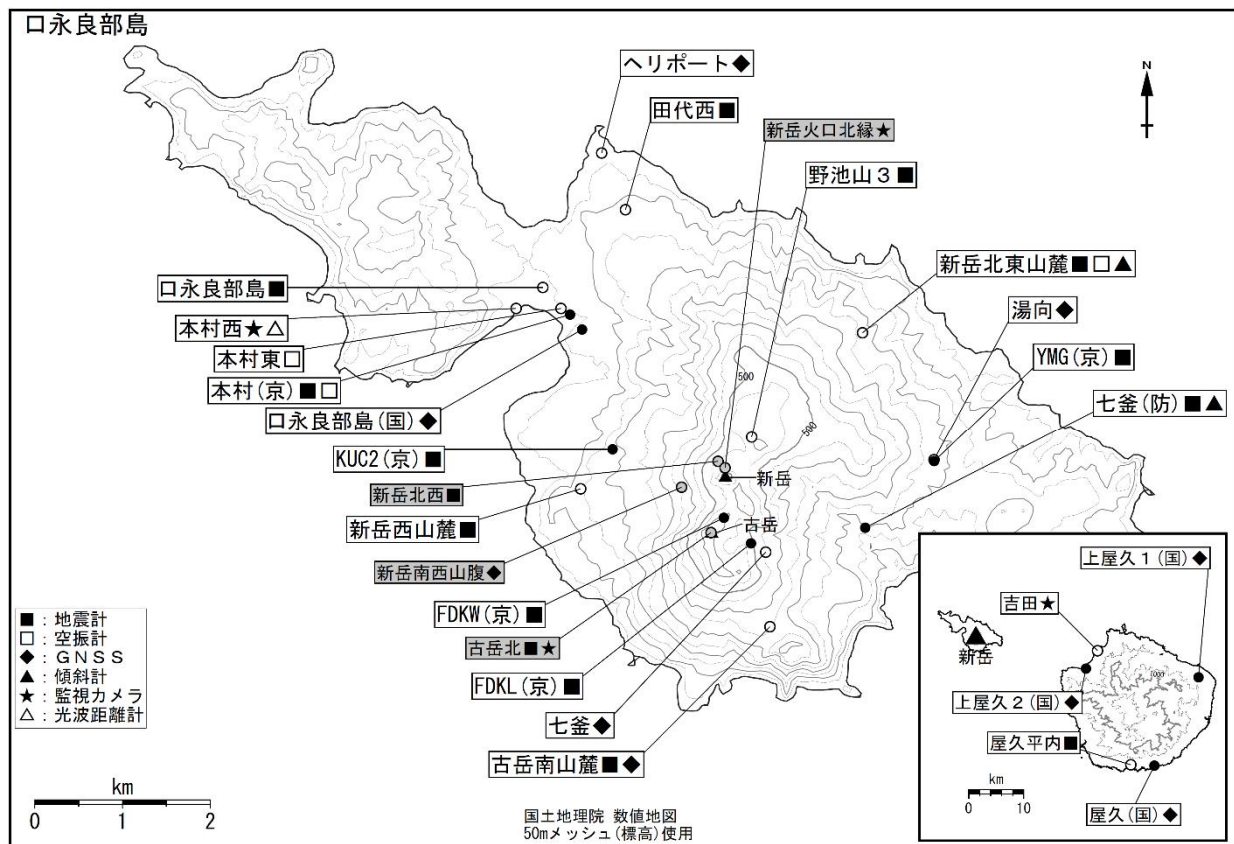


図6 口永良部島 観測点配置図

小さな白丸(○)は気象庁、小さな黒丸(●)は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。

(国): 国土地理院、(京): 京都大学、(防): 防災科学技術研究所

図中の灰色の観測点名は、噴火等により長期障害となっている観測点を示しています。